

米田ウジエエの思い出

波岡かね子



米田ウジエエの思い出

波岡かね子

米田ウジェニの思い出



ウジェニの肖像

波岡かね子

母が一九七三年に伯母達と大里で御墓参りをした直後に祖母の思い出の手記を書いたのは、別に深い理由があったわけではなく、「あとがき」にもあるように書くことそのものが楽しいことであり、親類の間に記録が一つぐらいあっても良いと思っただけではないでしょうか。

今回こうしてこの手記が日本製粉社史の一環として出版されるということは、亡き母にとっては想像もできないことでしょう。

日本製粉株式会社は、もちろん昔の製粉技師であった祖父米田龍平の方に主に興味があると思います。祖父龍平は私が生まれる一年前に亡くなっており、直接の交わりはありませんでしたが、彼のことは子供のときからいろいろと母から聞かされておりました。手記にもあるように、龍平は十代で生家を飛び出し、国を離れ、三十代になって「フランス」人の妻と三人の子供とともに製粉技師として日本に戻ったという型破りの人物でしたが、彼の中に明治初期の若者の精神の一端を窺うことができます。

ただ残念なことは龍平の米田時代の資料が少ないことです。彼自身の書いたものは一つも残っておらず、しかも子供や孫達に昔話をするというような人ではなかったため、母の手記が今では唯一の記録ではないでしょうか。私も龍平の生涯に興味を持っており、根気良く米田にある資料を掘り返せば龍平のことがもつとわかるのではないかと思っています。たとえば龍平が米田に入った年月や、どのようにして製粉技術を身につけたかということさえ正確には分かっていません。米田では十年に一度正確な戸口調査を行っていますが、最近一九〇〇年一月の調査に龍平、祖母（ウジエニ）それに二人の子供の名があるのを発見して喜んでいました。もうすぐ、それから百年経つことになりましたが、この仕事は始まったばかりです……。

最後になりましたが、母が残した手記『ウジエニの思い出』を、日本製粉株式会社の歴史の一齣としてとりあげて頂き、またこのような立派な小冊子として上梓できましたのも、ひとえに澤田社長はじめ関係者の皆様のご好意の賜と感謝に絶えません。心から御礼申し上げる次第です。

シアトルにて

一九九九年 「母の日」 五月九日

はじめに

日本製粉株式会社

取締役社長

澤田 浩

この手記は、明治初期の近代製粉技術の先覚者である米田龍平氏の三女かね子（エヴリン）さんが書き残されたものです。

私は数年前、龍平氏の曾孫に当たり、当時小田原市に在住されていた村上嘉代子さんからお預かりしたという「米田ウジェニの思い出」という手作りの小冊子を初めて読ませていただき、大変深い感銘を受けました。

村上さんは、曾祖父の龍平氏の足跡を大変熱心に調べられており、関係の深い当社にも問い合わせをいただき、当社の七十年史の中の氏についての関係記事をお送りしたことがありました。

龍平氏は明治元年大阪の生まれで十九歳の時単身近代製粉工場のメッカである米国のミネアポリスに渡り、十五年間機械製粉技術を学んだ後帰国し、わが国にその導入を図った日本の近代製粉産業のパイオニアともいえるべき存在であります。

この手記によると、スイスとの国境に近いフランス生まれのウジェニさんと龍平氏は米国で結ばれ、三人の娘さんをもうけましたが、さらに帰国後長男にも恵まれません。三女かね子さんのこの手記は、国際結婚によるお母さん（ウジェニ）の苦勞、特に風俗習慣のまったく違う日本での生活の戸惑いなどが、娘さんとして愛情のこもった大変美しい文章で綴られており、感動的であります。

龍平氏は、米国で「ドラゴン・ヨネダ」のニックネームで呼ばれるほどに著名な技術者となって、

明治三十四年に帰国し、官営製粉場の払い下げを受けた後藤半七の事業を継承する札幌財界の有力者に招かれ、札幌製粉となる新工場の建設に当たっています。

札幌製粉は、北海道開拓の恩人とも言えるホーレス・ケブロンによって、札幌に新設された官営製粉所をその源流としております。北海道の地に粉食普及の理想を掲げ、近代製粉の種を蒔いたケブロン志が、龍平氏により札幌製粉にはしっかりと受け継がれたといえましょう。

その後香港に渡り、英国人の経営する香港製粉の製粉技術を指導し、更に明治四十三年には門司の大里製粉所の工場建設の責任者となり、工場長として経営に参画します。

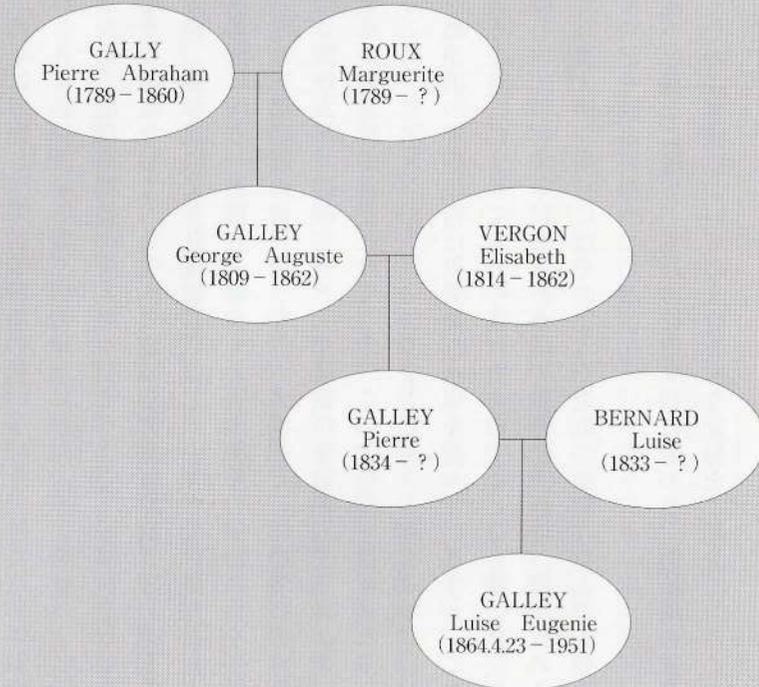
当社は、大正九年、札幌製粉と大里製粉所を合併しましたので、札幌製粉は当社のルーツの一つであり、龍平氏も当社の社員となります。このように、龍平氏と当社は深く結びついてゆくこととなります。

今日、わが国の製粉技術は世界最高水準を誇っていますが、これは米田龍平氏のような先人の血のにじむような努力によってもたらされたものであることを、われわれは忘れてはならないと思います。今、厳しい国際競争下にあるわが国の食品産業界は、龍平氏のようなベンチャースピリットが求められておりますが、当社にはそのような進取の気質に富んだ先輩のベンチャー精神が脈々と受け継がれていることを誇りに思っています。

この度不思議なご縁で、当社の社史発刊に合わせ、明治期の産業界のパイオニアの一人である米田龍平氏とご家族についての大変貴重な記録をご紹介できることは大変有意義なことであらうと思っております。

ここに、龍平氏のお孫さんに当たる波岡維作様をはじめご一族の皆様にお礼申し上げます。

ウジェニの系図



●ウジェニの父Pierreの職業はCabaretierとなっている。
GALLEY家の子孫は今でもSeloncourtに住んでいる（以上は1991年波岡維作氏の友人でフランスのブザンソンに住んでいる人にSeloncourtの役場に行って調べてもらったもの）。

米田ウジェニの思い出・目次

まえがき — 波岡維作…………… 2

はじめに — 澤田 浩…………… 4

父の死 9 / 母ウジェニのこと 10 / 秋の祭 11 / スイスの山越え 11 /
 アメリカへ 13 / 家庭教師 16 / 器用な母 18 / 日本の青年 19 / 新しい生命 23 /
 次女の誕生 24 / 三女の誕生 24 / 日本へ船出 26 / 札幌時代 27 / ミス・タオデの来訪 29 /
 長男の誕生 30 / 東京時代 30 / 香港時代 32 / 再び東京へ 37 / 下関と大里時代 39 /
 父の米国出張 41 / 小森江時代 43 / 父の死 47 / 三郎さんの帰国 48

あとがき — 波岡かね子…………… 51

追記 — 田中ゆき…………… 52

おばあさんの思い出 — 米田愛子…………… 54

編集後記 — 村上嘉代子…………… 56

追録・ソロンクーを訪ねて — 村上嘉代子…………… 58

後記 — 波岡茂郎…………… 61

私どもの愛する母ウジェニは、一八六四年四月二十三日ガレー家の次女としてフランスのソロンクーという農村に生まれました。姉一人と弟一人の三人兄弟姉妹でした。フランスのソロンクーという村はドゥー県のスイス寄りで、スイスの国境に近いところにあります。はるかに雪をいただいたモンブランの山々が見える静かな美しい村でした。

ガレー家は代々地主で広い土地とリンゴ畑をもっていました。カトリック教徒の多いフランスでしたが、ガレー家は代々敬虔なプロテスタントの信者でした。母もこれを受け継いで終生信仰に徹した人でした。

一八七〇年、母がやっと六歳になった時、普仏戦争が勃発しました。きのうまでのいとも静かな農村の平和はうち破られ、遠くから大砲のとどろきが響いてくるようになりました。子供たちは思わずふるえ上がって父母にしっかりと身を寄せたり、カーテンのかけにかくれたりして、不安な毎日が過ぎていきました。近所の家といっても、広い農村ではかなり離れていました。

父の死

ある朝、それは大変に寒い日でした。ウジェニの父は急用ができて、どうしても隣村まで危険をおかして出かけねばなりませんでした。とにかく無事に用を済ませて、帰途についたのは夕暮れ近くでした。ちょうど河のほとりにさしかかった時でした。折悪しく敵の兵士が、そのあたりを見張っていたのを見つけて、父は急いで岸边に生えていた草むらの水たまりに身をひそめたのです。長い長い時間がたち、夜がふけてあたりが暗くなってきましたと、冷たさがしんと身にしみてきます。死ぬる思いで身をひそめているうちに、すっかり体は冷えきって水にひたつた下半身はしびれてしまいました。そのうち体が燃えるように熱くなってきました。高熱が出てきたのです。体中の血が沸き上がってきたかのような苦しい時間を過ごしました。夜がすっかりふけて、ようやく兵士たちが立ち去る気配がしましたので、しびれた体を引きずってやっと我が家にたどりついたのですが、それが元で肺炎を発病してついに若くして天に召されてしまったのです。戦争のさなか、頼りにしていた夫を失い、幼い三人の子供をかかえたウジェニの母の胸のうちにはどんなであったでしょう。

戦争はフランスの敗北で終わりました。フランスは極度の貧困におちいり、国全体の緊縮政策が始まりました。国民一人一人あげての節約です。この国民一体になつての節約はついにフ

ランスに課せられた賠償金五十億フランを約束の日までに、一銭一厘も残さず返却したと母は私共に聞かせました。英雄ナポレオン三世は、母の嫌いな人でした。狂人だと母は言っておりました。母の一生は、この国中の政策の影響を受けて、じつに見事な節約ぶりでした。私共の使い捨てた鉛筆は母にとってまだまだ役に立ちましたし、紙なども裏まで使うように教えられました。

母ウジェニのこと

母は決して「けちんぼう」ではありませんでした。よく家に来るくずやおばさんが寒そうだと行って、暖かい毛皮のケープを与えてしまったり、寄付するときには思いきった金額を喜んで出すのでした。

母は快活な少女でありました。真っ白いなめらかな肌、くるみ色の豊かな髪を誰でもほめたものです。風の吹く日に外に出て髪をなびかせながら走って遊ぶのが大好きでした。

お友達と仲良く学校に通いました。学校で得意な科目は文法で、いつも満点をとったそうです。また、詩をよく暗記させられたそうです。その頃に覚えたいくつかの詩を、八十幾歳の晩年になって母を訪ねた時、私共に聞かせてくれましたのには驚かされました。そういう時の母

の顔は、昔を思い出すように楽しそうでした。

秋の祭

ソロンクーの村に秋が訪れますと、一年一度のお祭りがあってそれはにぎやかなものでした。その時はどこの家に行っても、おいしいご馳走のにおいやお菓子を焼くスパイスの香りがいっぱいでした。村の青年たちは日頃からめいめいの楽器を練習して、この時に美しいブラスバンドを合奏するのです。すると静かな農村はたのしさに沸き立ってくるのです。いつもトランペットを吹くのは母の弟のエドウィンでした。

スイスの山越え

その頃フランスでは物価が大変高く、中でも贅沢品と思われるコーヒーや砂糖などは手にはいりにくいので、人々は隣国のスイスまで（直線距離で七キロ）峠をこえて買いに行ったそうです。



*グレーの部分は
フランシュ・コンテ地方です。



時々子供たちも学校のお休みの日に大勢連れだって、お弁当をつくってもらって険しい道をスイスの町へ行ったものです。歌いながらおしゃべりをしながら、子供たちはまるで小鳥のさえずりのように、楽しそうでにぎやかでした。

やがてスイスの町にはいると皆それぞれ好きな買い物をして、重い荷物を持って買ったばかりのボンボンをしやぶりながら疲れた足で家路に急ぐのです。

けれども一つ途中に閑所があるのです。ここでは皆の買い物にチェックされるのです。どんな品でも一ポンド以上持つことは許されませんでした。

時には、ある人は大きな犬に別の道を通るように訓練させて首に余分の買い物をくくって閑所の目をくぐらせましたが、それが見つかり罪もない犬が殺されたというあわれなことが時々あったそうです。

アメリカへ

年月は過ぎて、ウジェニも美しい十七歳を迎えました。その年、一つの問題が彼らの家庭に持ち上がったのです。それは他でもない家の経済の問題でした。広い農園と果樹園の収入は、一家の主人が亡くなってからはだんだん減収になる一方でした。小作人たちはだんだん勝手な



アメリカ時代のウジェニ

ことをするのでどうしてもこのままにしておけない、大損をしないうちに果樹園と農場を売ってしまうよりいたしかたがないという相談が決まったのです。

もうその頃すでに、多くのフランス人の間では暮らしやすいアメリカに移住することが話題に上っていたのでした。そして知人の内にも早や渡米した幾人かの人たちもいましたので、ついにガレー一家もアメリカに移住することに決めたのです。

多くの親類や親しい知人をあとに、なつかしいソロンクーの村を出発して汽車はパリに向かいました。初めて見るパリの都に着いた時、ウジェニも姉も弟も本当に喜びました。船出を待つ数日の間パリの町を見物したのですが、その時ちょうどパリで万国博覧会が開かれていたため行ってみました。母にとって一番珍しく心を引かれたのは、日本から出品されていた陶器類でした。

いよいよ出航の日が来ました。母国フランスとの別れの日です。多くの船客とガレー一家を乗せた船はセナゼール港を刻々と離れて、船足も早く新しい国をめざして波をけって進んでいきます。幾日かの後いよいよ船は、めざすニューヨークに入港しました。波止場には、すでにフランスから移住していた友人たちが出迎えて下さって何くれとなくお世話をしてくださったので、どんなにありがたかったか、言葉に尽くせないほどでした。早速フランス租界であるニューヨーク市ロングアイランドのウッドヘーヴンに落ち着くことにしました。こうしてはるばる外国に来たのですが、多くの周囲の人々の親切を受けて生活することは幾らか早く淋しさを

忘れさせました。だんだん土地にも慣れて居心地よく、数年は夢のように過ぎ去りました。弟のエドウィンは、フランスで覚えた時計の技術を生かして時計店に勤めておりました。母も二十一歳を迎えて娘盛り、栗色の髪を頭の上に大きくたばねていました。その時代に流行した夜会巻きと申します。まゆは白いひたいに太くくつきりと印象的でした。

家庭教師

その頃アメリカ人の富豪の家庭では子弟を社交界に出す準備として、幼少の時からフランス語を覚えさせておく風習がありました。そのためにフランス人を家庭教師として家に迎え入れて、子らと寝食を共にさせ一日中フランス語で生活させるのでした。当時のフランス人の職とせずいぶんよい謝礼が払われたそうです。

母もある家庭から望まれてそこに住みこむことになりました。朝起きた時のごあいさつ、食事の時の会話、遊びに至るまで、また夜寝る前の髪の毛のブラッシング、そして「おやすみなさい」と寝るまですべてフランス語を使うのです。パーティがある時は一緒に馬車に乗って出かけるのでした。



エドウィン・ガレー
(母の弟)

器用な母

母は大変手先が器用でフランス刺繍や編み物が上手でした。自分の長いストッキングまで四本針で細い糸で編んだそうです。私共の家にあったレースのベッドカバーは驚くほど繊細な出来ばえでした。後年、孫たちのストッキング、ソックス、セーターなどいつも引き受けてくれました。私は習っておかなかつたことを残念に思っております。

母はよくニューヨークの町のショーウィンドーを見て歩き、自分のボンネットや洋服を作りかえる参考にしました。その通りに、一軒の日本人の店があることに気がつきました。そこには美しい茶器のほかに、いろいろな東洋の品々が目をひきました。東洋に魅せられていた母は、何とかして一度日本へ行ってみたいというのが切なる望みでした。

日本の青年

ある日母は、友人から、日本の青年を紹介されました。あこがれていた国、日本から来た青年——その人が私共の父、米田龍平でした。彼は親切でユーモアのある面白い人でした。



父・米田龍平

龍平が訪ねて来ると、ウジエニは日本のことを一生懸命に詳しく聞くのを楽しみにしていました。

龍平は十九歳の時、大きな夢をもって単身日本を去りアメリカに渡りました。勿論、進取の気性に富んだ彼は家族の反対をおしきって出かけたのです。言葉も習慣も解らず、苦勞を重ねて働いたのですがそのうち製粉の技術を学び、ついにこれが父の生涯の仕事となり、日本製粉界の草分けとして、その方面で知られる人となりました。ウジエニは、龍平が祖国を離れて淋しさのうちにもよく働くのを見ていつも励ましてあげるのでしたが、龍平にとってそのことがどんなにか嬉しく、淋しさを忘れさせてくれました。

彼女に対する感謝と喜びがいつしか恋と変わり、彼はしばしばウジエニを訪ねるようになり、またウジエニも彼の来るのが待たれるようになりました。その時彼女は三十歳の頃でした。姉はもはや結婚して子供が一人生まれ、弟のエドウィンもスイスの婦人と結婚していました。

ある日ウジエニは龍平との愛を母にうちあけ結婚の許しを願ったのですが、姉や弟と共に大反対されたのです。

「どうかそれは思い止まるように」とやさしく母や姉弟に言われては、ウジエニも考えなおさねばならぬ氣もしました。自分の考えは無謀にも思われますし、母の気持ちを思うとやはり自分は踏み止まるべきかもしれぬと数日考えに考えた末、とうとう龍平にこのことを手紙で書き送りました。

燃えるような青年の心を、こんなことでどうして思い止めることができましょうか。龍平から折り返し返事が来ました。

「貴女と結婚できなければこの世に生きる望みはありません。私はそれよりは死を選ぶ方がまだ幸福です」

という切実な思いが書き記してありました。心やさしいウジエニがこの手紙をみた時、どうして心がげしく動かずにいられたでしょう。この一人の異国の青年を見殺しにすることができのでしょうか。一体私はどちらを選ぶべきでしょうかと考えぬいて、とうとう結婚して日本に行こうと決心したのです。もともと大好きな日本の国、そこで私をこんなにまで愛してくれる人がいれば、何の不安も淋しさもないはずです。母や姉弟と別れるのは本当につらいが、「日本に行こう」とウジエニは最後の決心を思い切って母に打ち明けました。そのかたい決心をきいて再び誰も反対することはできませんでした。

この知らせをきいた龍平は、狂気せんばかりの喜びようでした。彼は本当にこの人を幸福にしてあげようと誓いました。

それからまもなく、親しい友人たちの祝福と愛情の内にガレー家の客間で結婚式が行われました。司式をなさってくださいくださった方は、日本のキリスト教会では有名なメソジスト派の本田庸一牧師でありました。

ウジエニの母は物静かな典型的なフランス婦人でした。何くれとなく龍平の世話をしたりし



エドウィンの家族

て、日本の青年を慰め励ましてあげるのです。龍平は毎日朝早くから家を出て製粉会社に勤めました。早く帰宅した時は彼の持ち前の器用さで大工仕事をしましたが、何をしても素人ばなれした立派な出来ばえでした。

新しい生命

やがてウジェニは新しい生命を宿しました。龍（ウジェニはそう呼んでいました）は生まれてくる赤ん坊のためにベッドを作り始めました。それは真っ白な仕上げで、大変見事なものであったそうです。一月七日（一八九七年）無事に女の子が生まれました。その髪はふさふさと黒く父とそっくりな丸々とよく太った赤ん坊でした。名前は、聖書の中のウジェニの好きな婦人の名をとってエリザベツとつけました。略してベティと呼びました。ベティはパパの手製の白いベッドに寝かされてすくすくと育ってゆきました。ママも器用な手を持っていましたので、ベティの為に洋服を作ったり編み物をしました。

その頃ママが作った可愛らしいフランス刺繍入りのジャケットがどうしたものかいつまでも家にあって、私のお人形に着せて遊びました。

パパはベティが大きくなるにつれて大変高価な外套や洋服、おもちゃなどを買ってこるので

したが、ママはこのような贅沢を気にしていました。

次女の誕生

ベティが二歳になった時、二番目の女の子が生まれました。一八九九年一月十三日でした。パパは日本人の考えとして男の子が欲しかったようです。名はやはり聖書の中の婦人からとって、エステル（エスター）とつけました。エスターはどちらかと言いますと神経質で、知恵づきも早いようでした。まだ本当に赤ん坊の時でした。もう、寝ついたと思ってそっと部屋を出ようとすると、すぐ感じて泣き出すのです。また夜中に時々火がついたように泣くので心配してお医者様を呼んできますと、お医者様が見えた頃、ケロツと泣きやむということが一度や二度ではありませんでした。

三女の誕生

一九〇一年六月二十三日日曜日の朝、三番目の娘、私が生まれました。その時パパはちよう



3人の娘とウジェニ
(貞子、ゆき、かね子)

ど、家族を呼びよせる準備のために日本へ帰って留守でした。

名前をエヴリンとつけました。この名は母が読んだ小説の中の大好きな女主人公の名前をとったそうです。この赤ん坊は面白いことに、生まれた時頭の中央にひとかたまりの白い毛があったそうです。それは次第に年とともに黒くなりましたが、エヴリンが九カ月になった時やつと龍平から手紙が来て、万事準備ができたから日本に来るようにとのことでした。

日本へ船出

ママは肉親の愛する者たちと永の別れを惜しみながら、愛する夫のもとに船出しました。ベティは五歳でしたから大分ききわけがありました。エスターはあぶない盛り、それにおむつのいるエヴリンを連れての長い船旅は思ったよりも大変でした。三週間の旅がやつと終わって、無事に、雨のそぼふる横浜に入港しました。岸壁に横づけされ、タラップを下りてくる母と三人の子供たちを迎えたのは、夫と四、五人の親類の者たちでした。久しぶりに会うなつかしい夫に近づいてウジェニは、「これが今度生まれたエヴリンですよ」と抱いている赤ん坊を見せた時、ちよつと赤ん坊を見ただけで「また、女の子」とのひとことがかえってきただけで、ひとことの喜びの言葉もねぎらいの言葉ありませんでした。夫の愛だけを頼ってきた母は、奈

落の底につき落とされた思いがしました。

「ああ、このままこの船に乗って再びアメリカに引き返したい」とさえ思いました。

親類の者たちはもの珍しそうに母を見ておられます。明治三十四年の日本でしたから、外国人を初めて見て珍しがるのも仕方がないことと思います。人々が雨の中を歩く下駄の音の何と妙にひびいたことか、と私に話してくれました。

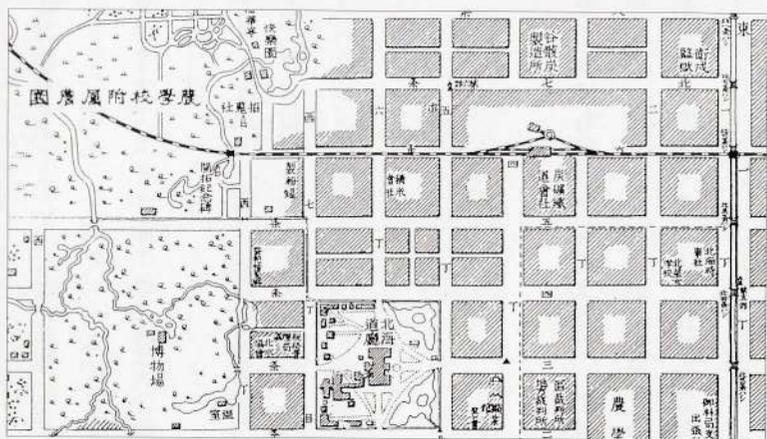
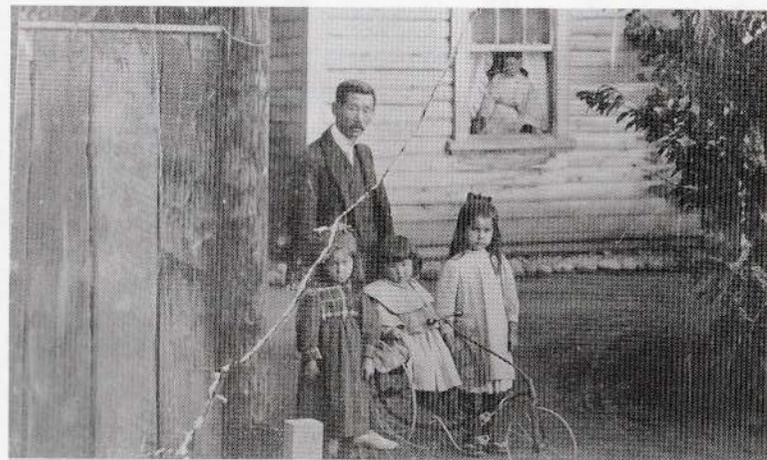
ママは思ったのです。自分一人ならばともかく、三人の子供を連れて親姉弟の反対を押し切って来たのに、いまさら帰ることはできないと。ママは涙をのんで夫のあとについてゆきました。

札幌時代

父は米国で学んだ製粉業を札幌で始めました。前にも書きましたように、これが日本における製粉界の草分けで、父はこの方面の貢献者であったことを時々耳にしました。

現在の北海道大学はその頃農学校と呼んでおりましたが、その近くに父は製粉工場と自宅を建てました。

母は横浜の波止場でのつらい思いを忘れようとじつと胸におさめて、ひたすら神の御助けを



上 札幌時代（父、ゆき、かね子、貞子と母）
 下 明治34年当時の札幌市内（中央左側に農学校
 附属農園に隣接する製粉場の表示がある）

信じつつ、この新しい北海道での生活を始めました。家は当時には珍しい西洋館でした。家具類は東京からすべて取り寄せられた立派なものでしたので、母はいつものように父の贅沢にひそかに心をいためておりました。

札幌の気候風土は何となく母国フランスに似たところがあって、日に日に土地に慣れてきました。春になるとタンポポが一度に黄色く咲くのが嬉しかったようです。と言いますのは、フランスでは冬の間に濁って濃くなった血が、春になってタンポポの葉を食べるときれいになるという云い伝えがあったからです。牛乳は農学校に行けば搾りたてのを分けてもらえましたので、エヴリンはよくお手伝いさんに連れられて農学校に行きました。

ある日お手伝いさんが四角い白いものを買ってきましたので、母はカッテージチーズかと大喜び、早速味を見ますと味にもおいもなかったのでびっくり。それはじつはお豆腐だったのです。

ミス・ダオデの来訪

ある日のことでした。一人の米国人の宣教師ミス・ダオデが母を訪ねてくれました。母はどんなにか喜んだでしょう。それ以来大変お親しくなって、長い長い交際がつつきました。

長男の誕生

父の待ちに待った長男が生まれました。ちょうど日露戦争に勝った年でしたので、捷と名づけられました。日本に来てから、私も姉妹三人の名も日本で呼びやすいように改め、上の姉はべせ、あとになってさらに貞子、次の姉は雪子、私のかね子と名づけられました。でもママは私をいつもエヴリンと呼んでおりました。

東京時代

札幌の生活はあまり長くなかったようです。その理由は私どもにわかりませんが、私の想像では、当時まだパン食の少ない時代ですから需要が少なく引き合わなかったのではなかったでしょうか。

東京に引き上げることになりました。まだ小さい弟を連れて北海道からの長旅は、ママにとつては大変なことでしたでしょう。

東京の宿に落ち着いたと思うと、雪子がひどい腹痛をうったえはじめました。お医者さんの

診察によりますと腹膜炎ということですのでいぶん心配いたしました。雪子はお薬をのむのがいやで pas bon pas bon すなわち、まずいまずいとフランス語で言っただけのものまなかつたか。でも無事に生命が助かりホッとしたとききました。

この頃までは私どもの家庭では専らフランス語で話したようですが、東京に落ち着くことになってから母は英語で話すようになりました。その理由は、日本では英語が使われてフランス語はほとんどきかれなかったからということですが、

札幌のよい環境のあと東京の芝の生活がはじまりましたが、母は何となく好きではありませんでした。東京の生活に慣れるまでという理由で、父の姉が来て手伝ってくださることになりましたが、習慣の違いなどで伯母はことごとくに母につらくあたりました。母はおとなしい人でしたのでたいいのことはだまって辛抱しておりました。伯母の作る食事は北海道の時と比べ、あまりにも粗末でした。そんなある日のこと、突然札幌からミス・ダオデが訪ねてくださいました。その時の喜びはどんなでしたでしょう。母の顔を見るなりミス・ダオデは、「まあ、どうしてそんなにやせたのですか」と驚かれるほど母は変わっていたのでした。

「食事が悪いのではありませんか」と言われました。食事と気づかないなどがそうさせたことと思います。

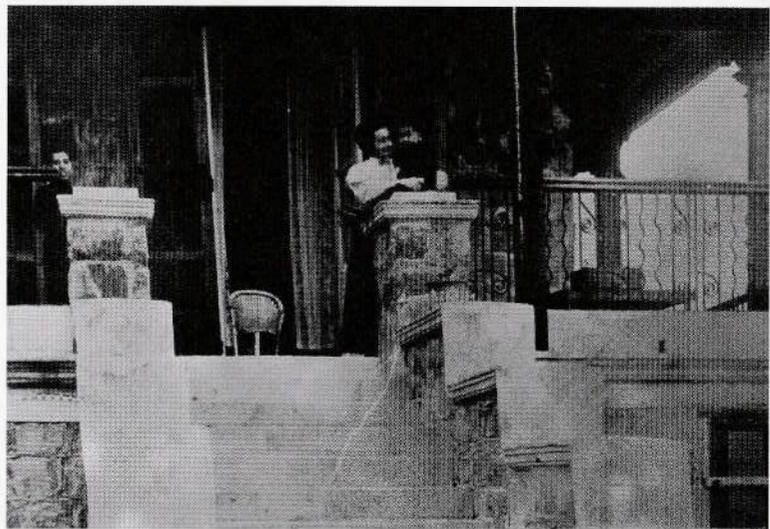
香港時代

ちょうどその頃、香港で製粉会社を経営しておられた英国人の招きを受けて、父は香港に行くことになりました。

初めは一家中で行くことを考えておりましたが、貞子と雪子のために香港には日本人学校がなく、英国人の学校に入学させると日本語を忘れてしまう心配があるので、かわいそうでしたが二人は姫路に住んでいたパパの姉にあずけられ、私と弟だけが両親に連れられて香港に行くことになりました。

早速私も四人は香港へと旅立つことになりました。旅順丸(?)に乗り幾日もたたぬ内にひどい台風に出会いました。船が大ゆれにゆれてキャビンの丸窓に風雨がたたきつけました。母はひどい船酔いで起きることができずボーイが食事を運んでくれましたが、私と弟は船のゆれるのが面白くて船内を走り回って遊びました。

香港へ入港してからジャンクペーの家に落ち着くまで、キングエドワードホテルにしばらく滞在しました。高台にあったこのホテルの夜景はすばらしく、まるで宝石をちりばめたようでした。



香港の家
(母と捷、左は池尾秀さん)

父の勤める製粉会社はジャンクベアをモーターボートで渡ってゆくのです。そこに石造りの家が二軒あって、一軒は私どものため、もう一軒は英国人の牧師の家でした。私どもの家の一階は地下室になっていて、段々を上ると周囲はウエレンダーで正面に入口がありました。パーラーにはシャンデリアが天井からたれていました。ここから香港の町のあかりを見ますと何とも言えぬ美しい夜景でした。パーラーの隣の小さい部屋に、池尾秀さんという書生さんがいました。製粉会社に勤め、また父の助手を務めておりました。年はまだ十七歳位だったでしょう。この方はじつに忠実に父母に仕えてくださいました。生涯日本製粉会社で働き、ついに重要な地位にまでつかれ、いまは神戸在住で八十幾歳の長寿で幸いな日々を悠々と過ごしておられます。

私どもの家から細い道を通って小高い岡を登って、ママと一緒によく散歩をしました。そのあたりは灌木が多く、また岩が出て歩きにくいところでしたが、景色がよいので私どもにとつて忘れることのできないなつかしい思い出の散歩道です。時々大きなインド人の巡礼に会いましたが、いつもやさしく私どもに話しかけてくれました。

香港では暑さがきびしいので、たいいていの人々がグリーンの布を裏に張った軽くて日除けになるヘルメット帽をかぶっていましたが、子供用のもあって弟もかぶりました。それがとっても可愛らしいのです。

この地方は台風の通路にあたっていて、その季節になりますとその被害はひどいものでした。

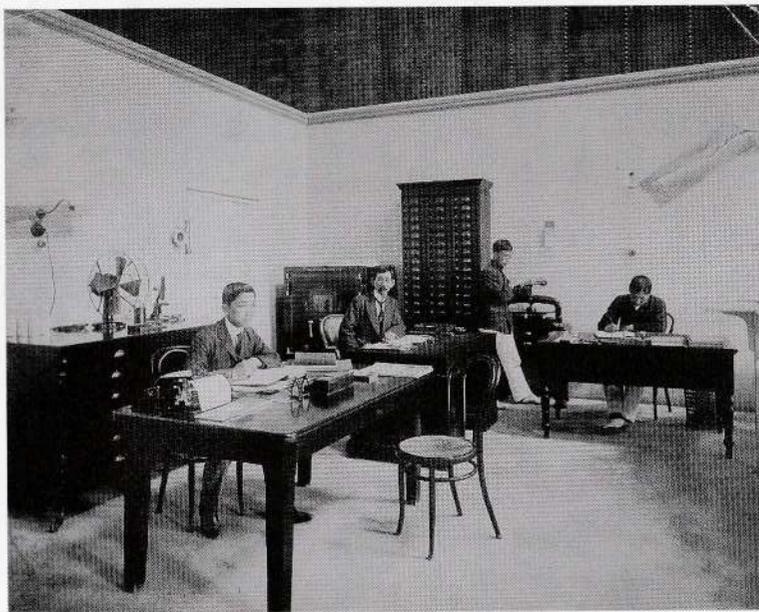
この辺の労働者の家は半分水面に乗り出すように柱を立て、その上に部屋を作って住んでいますので、台風が来るとひとたまりもなくつぶされ流されてしまうのです。私は子供心にも気の毒だなーと思いました。

ある日のこと、父は私と弟に「今からママと香港の町まで行ってくるからおとなしく待っていなさい」と言って出かけました。ママはしばらく帰ってきませんでした。幾日か経ってある日のこと、パパは私どもを香港の町へ連れていきました。大きな建物の中にはいり長い廊下を通って部屋に案内されました。中にはいりますと、すっかり変わりはてた弱々しい青ざめたベツドの上のママの顔がそこに見えました。ママは嬉しそうに目にいっぱい涙をためて

「子供たちよく来てくれたわねー」と力ない声で私どもを抱きよせて接吻をして喜びました。私どもは小さかったので何の病気で入院したのか知るよしもありませんでしたが、私が大きくなってから母と香港時代のことを話している時、それは流産のためであったことや、男の子であったことなど話してくれました。原因は家の近くでころんだためだったそうです。流産のあと悪くて手術をしたということです。病院は英国人の経営する大きな病院でした。

父は香港時代に宴会が多くウイスキーの量がだんだん増してきて、呑むと機嫌が悪く、時に何か気に入らぬことがありますと狂暴にさえなって母を困らせ、苦しめました。それを見て私は子供心につくづく酒のおそろしさを知りました。

私も小学校へ入学の年に達しましたので、日本へ帰ることになり、姫路の伯母の家に姉たち



香港製粉 事務室

と一緒に住むことになりました。伯母は子供を持ったことのない人で、私ども三人に冷たく、いろいろなやみを言われてよくいじめられましたので、早く父母と一緒に暮らしたいと思わぬ日はありませんでした。

再び東京へ

時は明治四十三年、思いがけなく早く、父母が香港を引き上げ私どもは一家そろって住めることになりました。と言いますのは、香港の製粉会社の社長さんが急に気が狂ってたくさんのお金を持って海に飛び込み自殺をして、会社は閉鎖されてしまいました。こういうわけで父母は帰国することになり、私どもは再び東京に住むことになりました。

私どもの家は四谷の愛住町で、お寺がずらりと並んでいました。石門寺、赤門寺、それに黒門寺と覚えやすいのでいまでも覚えています。道をずっと行くと「暗闇坂」という樹木の繁った坂がありました。坂のすぐ側に私どもの通った愛住小学校がありました。校長は桜田先生という大変人格者で女の方でした。

母は香港の生活から、また東京の生活に変わるのには気がすすみませんでした。お手伝いさん相手にだんだん慣れてきました。



東京時代の子ども達
(ゆき、捷、貞子、かね子)

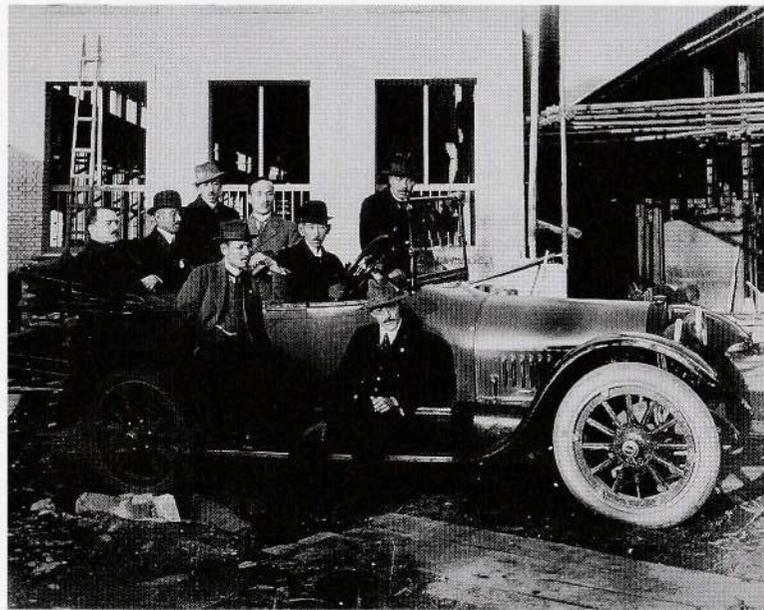
母にとって一番楽しいことはアメリカの弟からの便りでした。弟のエドウィンは大変信仰の厚い人で、いつも聖書の句がいつぱい手紙をうめておりました。母は私どもが日曜学校に行くようにすすめましたので、市ヶ谷教会へ休まずに喜んで出席しました。いまから考えますとそれは相当の道のりですが、その頃は平気で歩いたようです。

小さい時から神様を礼拝することを教えられましたことを母に深く感謝せずにいられません。

下関と大里時代

私が小学校四年生の時、父は大里に新しく建てられた大里製粉所の工場長として赴任することになりました。私ども家族は、下関市から二里ほどある住宅地長府に住み、父は大里に家を借りてばあやが世話をしていました。週に一回人力車で長府の家に帰ってきました。

長府というところは侍屋敷が多く美しい静かなところでしたので、母は大変気に入って、畑にレタス、きゅうり、トマトなどを作ったり、花々を植えて楽しみました。でもいまから考えますと、母にはお友達もなくずいぶん淋しい思いをして暮らしたことだろうと思います。私ども下三人のきょうだいは、東京で見られなかった山々や海がすぐ近くに見えるのが嬉しくて大喜びで遊び回り、海岸の砂浜ではよくはまぐり、マテ貝、あさりなど取りました。でも上の姉



大里工場での父・龍平（運転席）

は物思う年頃でしたので東京がひたすら恋しくて、毎日毎日、「東京に帰りたいわ。こんな田舎はつまらない」と言いつづけて泣いていたのを覚えております。

長府には二年ばかりおりましたが、会社と住宅が離れていることが不便でしたので、下関に引っ越しました。

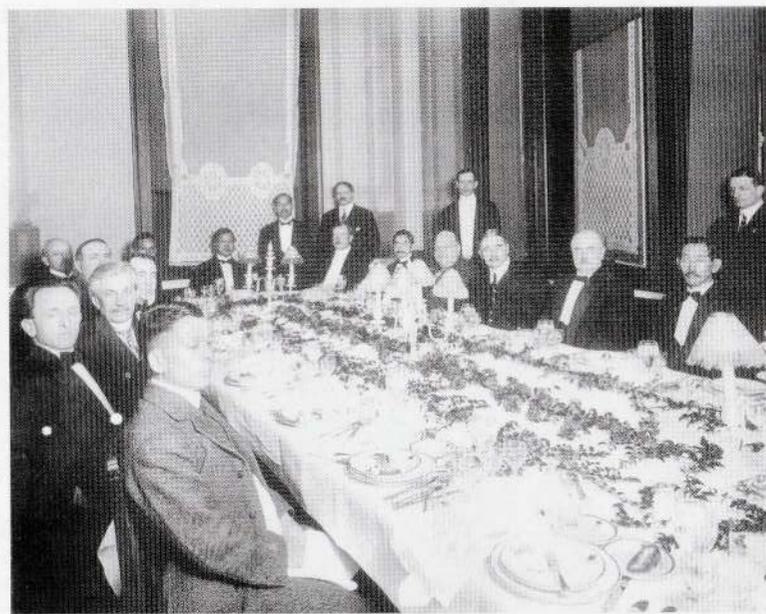
雪子姉はその頃市立下関高等女学校に、私は新しく建設されたミッションスクール梅光女学院に通っております。

梅光にはアメリカ人の宣教師の方が四、五人おられましたので、母はその方々と親しくなれて幸せでした。

父の米国出張

この頃、父はアメリカへ出張旅行をしました。その間しばらく小さい家に移り住みましたが、ここは山の麓で裏山も近く、また小さい牧場も近くにあつて新鮮な牛乳をかうことができ、母の好きなカテージチーズもよく作ることができました。パパの留守の間用心棒として吉岡正さん（豊さんの弟）が京都から来てくださいました。

パパがアメリカから帰国して間もなく、姉貞子は吉岡豊兄さんと結婚いたしました。ママは



米国出張中の龍平（右端、1913年3月5日シアトル・ワシントンホテルにて）

日本風の結婚準備は何もわかりませんでしたので、パパの姉さんたち二人が来て手伝ってくださいました。

小森江時代

父の会社のある大里に近い小森江に、私どもは引越すことになりました。それから一年後に、すぐ近くの小高い岡に父は家を新築しました。この家はまことに絶景ともいべき場所にあつて、関門海峡が一目で見られる素晴らしい眺めです。

夕暮れになりますと、大きな太陽が海に沈んでゆく時、家は黄金色一色につつまれてしまうのです。向こうに見える大きい島は彦島、その左に見える小さい島は歴史で有名な巖流島です。海峡は波が静かでした。海を通る内外の船が手にとるように見えて、ことに夜などは船にともされた明るい電気が海に映って水上に浮かぶホテルのようでした。

ママは外国船が通るのを見るのが楽しみのひとつでした。きっとなつかしい母国のことや、愛する肉親の住むアメリカのことを偲んでいたのでしょう。

外国の豪華船が通る時は私どもは見なくてもわかるのです。その汽笛の音が太くて底力の



小森江時代の母

ある音だからです。その音がきこえると何をさしおいても、ママと一緒にお庭に出て船をながめるのです。折よく船尾にフランスの旗がひらめいている時の喜びようといったらありません。赤白青の三色からなるフランスの国旗がママにとって大切な物であったように、私も子供たちにとっても、他の国の国旗に感じられない特別な親しみをもっております。

ある日門司にヴィクトル・ユーゴーというフランスの軍艦が入港して、希望者は誰でも船内を見学できるということでしたので、母と二人で出かけました。タラップで軍艦に乗りますと、若いフランスの水兵たちが迎えてくれました。ママがフランス人であることがわかると水兵たちは歓声をあげて喜び、上官のところへ連れていきました。ママは久しぶりに話すフランス語です。その嬉しそうな顔を忘れることはできません。大きな人たちにとりかこまれた、小さいフランスの婦人をご想像ください。

横に立ってこの様子を楽しそうに見ている私に、水兵や上官たちは気がついて、「あなたの娘さんですか？ フランス語は？」ときかれて「話せないのです」とママが答えると、上官の一人が急に真面目な顔をして「教えなければいけませんね」とたしなめるようでした。他の見学者をさしおいて、上官自身で船内を隈なく案内してくださいました。帰りの船に乗り移る時も水兵に、「ここにフランス婦人がいるから気をつけて」と注意を怠りませんでした。本当にママにとって楽しい一日でした。

小森江での生活はママにとって幸せな日々だったと思います。裏の畑ではいろいろな作物が

とれました。土いじりの好きなママを手伝ってくれる、とても人のよいお百姓のおじいさんがいました。レタスやトマト、きゅうりなど食べきれぬくらいとれましたし、いちじくは三本大きな木があつて本当においしい実をたわわにつけました。

捷が小倉中学校から早稲田大学建築科に入学したのはこの頃でした。

雪子姉はこの頃田中寅次郎兄と結婚しました。そして私は神戸女学院在学中でした。

この頃、ママのお友達は小倉にいらした聖公会の宣教師ミセス・ハインドでした。よくママを招待してくださつて英国風のお料理をご馳走してくださいましたし、時々小森江の家を訪ねてくださいました。その頃山口県の萩に住んでいた毛利公が、フランス語を習うためにしばらく来られました。ママはこれを楽しみにしておりました。ママの服装は大変質素でしたがいつも身だしなみをくずさず、また髪をみだしたのを見たことがありませんでした。夜の食事の時には台所からすぐ食卓に着くのではなく必ず鏡の前でさっぱりと直していました。いつか何かで読みましたが、フランスではどんな下宿屋のおばさんでも、ちゃんと身をととのえちよつとしたおしゃれをして夕べの食卓に向かうそうです。母もその習慣をまもっているのだと思いました。フランスでは夜の食事には少女にもブドウ酒がついたそうです。

私どもが幼かった頃、ママによくフランス語の童謡を歌ってもらいました。ジュワイユチクタクタクタイムレーと始まる水車の歌、エスカルゴの歌、ねんねの歌。大きくなってからは、讚美歌をよく二部合唱しましたがママは美しいソプラノでした。

父の死

必ず受けなければならぬ悲しみの日が我が家にも来ました。元気で熊本方面に出張した父が旅行先で発病、脳溢血で五日目に召されましたのは一九二七年五月五日でした。

肉親の反対をおしきつて遠い日本へ、ただこの父を信じ頼つて来たこの人との二十七年の日本の生活がいま終わったのです。母は本当に淋しそうです。私は母の心を計り知ることではできませんが、百年も前の国際結婚というもののむずかしさは想像することができません。それは妻の国に住む場合に成功するのではないのでしょうか……例えばアメリカ人と結婚した妻が日本人ならば日本に住むことが最も成功し、日本人と結婚した妻がアメリカ人ならばアメリカに住むことが一番うまくいくと思います。

けれども現在の日本は昔とすっかり違って欧米化していますから、どちらがどうでもやりやすいと思います。

ママに日本の着物や袴をたためとか、日本酒にあう酒の肴を作るように注文することは無理なことです。一事が万事習慣の違いは父から見ればもどかしく感じることはかりでしょうが、ママには無理な注文です。でも娘たちが大きくなってからは、すべて娘が母に代わってしまし

たのでこのようなことは父は不自由しませんでした。

私はいくら思い出そうとしてもパパがママとしんみり語り合っている姿を見たことがありません。でも母は父に対する愚痴を私どもにもらしたことはありませんでした。いつも明るく快活でちょっぴりユーモアがありました。エープリルフールの朝はよくだまされたりだまされたりして大笑いしました。

パパが亡くなってからはお手伝いなしでママと二人でひっそりと暮らしました。

山の中腹の一軒家でしたので夜などは何となく不用心でしたが、よく一緒にフランス語の讚美歌を歌って淋しさを忘れられました。

三郎さんの帰国

留学中の私の婚約者三郎が六月に帰国しました。ちょうどパパの還暦のお祝いの年でしたので、パパはその日にシルクハットをかぶるつもりであったのか、三郎がアメリカから買ってくるように頼まれ、苦心して買ってきたのですがひと足違いでついに間に合わなくて残念なことでした。

私どもは七月に結婚式をあげ、はるか岩手県の遠野というところの教会に奉職することにな

りました。捷はもはや結婚して東京に住んでおりましたので、小森江の家を手放すことになりました。捷はもはや結婚して東京に住んでおりましたので、小森江の家を手放すことになりました。

遠野は大変田舎で山や川の美しいところでしたので、ママを呼ぶことにしました。ちょうどその時長男維作が生まれましたのでずいぶんよく手伝わってもらいました。

その後ママは捷と住んだり、また私の方へ来たりしておりましたが、私どもが姫路の教会に赴任してからは大分長くママと一緒に暮らしました。ですから姫路ではいろいろなお友達がかまきました。

日ノ本学園のアメリカの宣教師、聖公会のイギリス人宣教師ベーカー氏、米国帰りの池辺夫妻、いつもタンポポをとらせてくださったお千代さん、教会の中谷夫人などは特に仲良くおつきあいをしておりました。

私どもの家庭には男の子供が三人になりました。ママはよく三人を連れて散歩に出かけました。子供たちは床にはいつてからグランマーからおとぎ話をしてもらうのを楽しみにしていました。シンデレラ姫、赤ずきん、狼と三匹の羊など、私どもが小さいときに聞かせてもらったお話でした。こうしていつの間にか子供たちは英語を覚えたようです。

母はいつも八時になると「ボンヌイメザファン」と言って二階に行って子らと床につきましたが、これもママの健康法の一つであったと思います。

早寝早起きで朝は一番早く起きて、私どもの朝食の用意をしてくれました。とてもありがた

かったです。男の子三人はだんだん大きく成長してあばれまわるものですから、母が騒々しくて困っているのを見て、私は捷に相談しました。ママはかねてから自分一人で住む便利な小さい家が欲しいと言っていましたから、この際、捷が望みどおりのものを建ててあげるようにと。弟もこれに賛成して早速自分の家のすぐ横に可愛らしい家を建てて、ママを迎えました。ママもかねてからの望みがかなえられ、自分の息子の建てた家に静かに住むことができて大満足でした。捷の娘の愛子はことのほかやさしい子で、グランマーのお世話を私どもに代わってよくしてくれました。この頃時々遊びに来てくださいましたのは、小倉在住のイギリス人宣教師のハインド夫人でした。

戦争がたけなわになってくる前に外国人は皆帰国しましたが、ハインド夫人もオーストラリアへ行ってしまわれました。ママはたった一人の外人、世の中は外人さえ見れば敵と思ってしまうことをするかわからないから外出しないように、と警察から注意されたそうです。

とうとう戦争も終わってママもどんなにか平和を喜んだことでしょう。幼少の時の戦争の経験、そしてこの晩年での戦争の恐ろしさをママはいやというほど味わいました。

ママも日々に肉体の弱ってゆくを感じる」と手紙に書いてきましたが、信仰はますますかたく、幼子の如く美しくみがかれてきたようでした。一九五一年十一月六日、八十八歳で、しまつるイエス様のみもとにやすらかに召されました。

あとがき

ママの一生を、聞かされたこと見たことを書きつづってみることは、本当に楽しいことでした。もっともっとママを喜ばせてあげればよかったのにと悔やまれます。私がこの年になってくるとやっと気がつくことばかりです。あんなに幾度か口にしていた生まれ故郷へ、一度連れて行ってあげたかった。ママの好物だった黒パンのステキなのを焼いてあげればよかった。

ママの一生を考えますと「忍耐」の一語で言い表せると思います。人と争うことなく物静かにひたすら神に頼り、人を愛して、平凡ですが自分で幸いな人生を開いていった人だと思いません。周囲がいかにあろうと!!

ママは長い日本の生活でしたが、一度もお寿司とお刺身ととろろをいただいたことがありませんでした。また、仕出し屋さんや料理屋のご馳走はどうしてもただかない、ガンコともいうところがありました。いろいろと思ひ出しますことがあとからあとから出てきます。その度に書き加えてゆきましよう。どなたでもどうか書き加えてください。(一九七三年九月五日)

追記

妹かね子が長々と書きつづったものを、一息に読んでもう一度くりかえし読みました。すべてよく書き尽くされて、思い出の一つ一つがなつかしく心の中に繰り広げられました。本当にやさしい母でした。私が物心ついてから殆どしかられたということがなかったようで、決して強い言葉でしかったりせず静かにたしなめるくらいでした。

日本での生活の違いなどいろいろと苦労も多かったのに、本当に忍耐強く不平をもらさないで、常に喜びと感謝の気持ちを見失わず、キリストの精神があらわれていました。私も少し小森江時代のことを書いてみましょう。

妹が書いているとおり、自然につつまれた小高いところにあった小森江の家に住んでいた頃が本当に楽しい日々のようなのでした。

私の夫がまだ結婚前の頃、時々訪ねてきてママにフランス語の会話を教えてもらっていましたが、どちらもずいぶん楽しそうでした。この写真はその頃彼が写したものです。その後私どもが結婚してからは、やはり小森江でほど近い山の中腹にある社宅に暮らしていましたので、二人の幼い子供を連れてはよくグランマーのところへ遊びに行っていたものです。ママは二人の孫



小森江時代の父母
(後ろはかね子)

たちが来るのを喜び迎えて、器用な手で子供服にフランス刺繍をしてくれたのも嬉しかったです。

それから幾十年、私たちも転居であちこちはなれていましたが、ママが大里の弟、捷の家の庭さきの可愛らしい家に住んでいる頃、私は東京からかね子や時には娘の愛子と数回訪ねて行った時、年老いたママはどんなにか喜びましたことか、本当に嬉しそうでした。私たちも時折訪ねるのを楽しみにしていました。でも帰る時が淋しそうで気の毒でした。それから年月が流れて八十八歳でついにやすらかに天に召されました。小森江時代から五十年を経た一九七三年五月、妹と思い出多い小森江に、昔住みなれた主のない家を訪ねて大里での墓参をして昔を偲びました。

少しばかり思い出を

一九七三年九月 田中ゆき

おばあさんの思い出

私はパンが大好きです。おばあさんが日本製粉のフスマという黒い粉でパンを焼いて食べさせてくれました。そのおいしかったことが忘れられません。もうあのパンをふたたび食べるこ

とができなくてさびしくなります。黒パンはオーブンで焼いていました。長いスカートに、しぼったぼうしをかぶって焼いていた姿が思い出されます。また、にわとりを飼って、毎日楽しみにしてえさをやっていました。私が洗濯物を干していると、すぐさおをもってきてくれました。戦争中はいやでした。

最期の死に顔まではっきり覚えています。たった三日のわずらいでした。最後にスープをつくってあげてそれを食べて、夕日が暮れてベッドの横で讚美歌を歌ってあげると、とても喜んでくれました。もう一度あんな時があればと思います。

一九九六年八月 米田愛子

昨夏私がアメリカ旅行を計画していた時、田中ゆきさんの次女の千葉愛子さんから、シアトル在住の波岡維作さんを訪問することをすすめられました。母の従兄弟の維作さんは、弟の茂郎さんと大里に来たことがあって、母は小さい頃一緒に遊んだことがあると言っていました。私は初対面でした。維作さんから昔のことを聞くことができたうえ、彼のお母さんが書かれたウジェニおばあさんの伝記を読むことができて夢のようでした。

私にとって曾祖父母にあたる龍平おじいさんとウジェニおばあさんのお墓は、大里の城山霊園にあってひとときわ目立つ黒い大理石のキリスト教のお墓で、そこに長男の捷とその妻とともに眠っています。私は里帰りの度にも母とお墓参りをしています。でも、彼女は私の中でずっと謎の人物でした。

曾祖母がフランス人であることは昔母に聞かされていましたが、曾祖父と結婚したいきさつなど、私の母さえ知りませんでした。母の父、捷はとても無口な人で自分の両親のことについて娘たちに語ることはほとんどなかったそうです。母の実家は私の家から歩いて五分のところでありましたから、私は時々母に連れられて遊びに行っていました。ウジェニおばあさんが住

んでいた離れから、コーヒーの香りがただよっていたような気がします。彼女は私が四歳の時亡くなったようなので、その時曾孫は私と妹の二人だけだったわけですから、きっとかわいがってもらったのではないかと思えます。でも幼かった私は、その容貌が少し違う高齢の外国人のおばあさんが怖くて、顔を見ると泣いてしまったように覚えています。

もう一つ私にとって忘れられない思い出は、おばあさんからもらったバッグとして使えるようになっているフランス人形(?)です。帽子をかぶりブロードの長い髪をしたかわいい顔のお人形で、帽子とお揃いのピロードのドレスの脇のポケットから物が入られるようになっていのです。その人形は出かける時には持ち歩き、いつまでも大切に私の部屋にかざっていました。

今から六年前に伯母の米田愛子さんから紹介されて千葉愛子さんと音信がとれるようになって、私はしきりに先祖のことを調べはじめ、米田家の系図を送ってもらったり、果てはフランスのガレー家の系図まで手に入れることができました。その頃九十歳でお元気だったお母さんのゆきさんからもお話を聞けて、断片的にいろいろなことがわかりかけてきたところ、去年思いがけずこのような形ですっかり知ることができましたことは、本当に私にとってこの上ない喜びでした。龍平おじいさんの偉大な人生、ウジェニおばあさんの素晴らしい生涯を知ることができ、感激すると同時に、彼らの子孫であることを誇りに思います。まだ伝記を読んではない親戚の方々や身内にも是非この感激を味わってもらいたく、頂いてきたコピーをまとめはじ

めました。

もっとたくさんの方々がい出を書いてくださることを願っております。

一九九六年八月

村上嘉代子

追録・ソロンクーを訪ねて

私は一九九七年七月三十日に、曾祖母がもう一度行きたがっていた彼女の生まれ故郷を娘とともに訪ねました。七月二十三日成田を発ち、イタリアをまわり、スイスのチューリッヒから列車でフランスへ入りました。ソロンクーに近いと思われるベルフォールのホテルを予約した時、旅行社では詳しい地図にもソロンクーは見当たらないといわれ、かなりの不安を抱きながらの出発でした。でも、ベルフォールの駅について案内所で聞くと、確かにソロンクーはありました。列車でモンペリヤールまで行き、バスを乗り継ぐと教えてくれました。二つ目の駅モンペリヤールに着き、駅前を出発しようとしていたバスに、ソロンクー行きのバスを尋ねると、その運転手さんは英語が話せて Come with me. とドアを開けてくれました。バスからの景色を少しでもたくさん見ようと窓から一生懸命外をのぞいていましたが、その辺りはまだまだ町でした。途中で別のバスに乗り換え、三十分ほどで着いたソロンクーはスイスの国境にかなり

近いところ です。バス停付近はパン屋さんや小さいレストランなどのお店が数軒あり、道路や川の欄干は色とりどりの花を植えたプランターできれいに飾られ、こざっぱりとした静かな町でした。バス停の真ん前であって、フランスの国旗など数本の旗がはためくピンクの二階建ての建物が、市役所 M A T R I E でした。市役所では、私が持参した訪問の目的を書いた手紙を、英語の話せる職員が戸籍係の人に通訳してくれました。金庫から何百年も前のものと思われる分厚い出生届を取り出してめくり、私からの情報と照らしながら、数人の興味ありげな職員の見守る中、ついにパソコンで遠戚の人を探し出して電話で連絡をとってくれました。そして、初老の男の人が私たちに会いに来てくれたのは、ほんの十分後でした。ソロンクーをこの目で見ただけでも思っていたのに、血縁の人に会えるとは夢のようでした。彼は、ピエール・メネギーという人で、突然の私たちの訪問を本当に喜んでくれ家に招いてくれました。家に向かって川沿いの道を歩くと、店などが立ち並んでいた表通りとは全く違う田園風景で、畑とかわいい家が点在する農村でした。途中で、私たちを迎えに来てくれた青年と出会いました。ピエールの十八歳の孫息子でとても感じの良い青年でした。彼の英語の通訳を介して、私たちはようやく会話をすることができました。彼らはその年の五月にイタリアの波岡さんの訪問を受けていたので、私と娘の突然の訪問もそれほどびっくりした様子ではありませんでした。彼らの家は色とりどりの花に囲まれ戸口を一步入ると、中は、素敵なソファや飾りだなが整然としていて、テーブルの上には花が生けられ、大きな窓から明るい光が注ぎとてもきれいな部屋で

した。

ピエールはいくつかの書類を取り出してきて見せてくれ、その中に千八百年頃からの家系図がありました。それによると、彼の奥さんであるエレンの祖父がウジェニの父親と兄弟だということでした。あいにく彼女は留守で会うことはできませんでしたが、その制作中の家系図に私の母、愛子叔母、そして私の家族の名前を書き入れることができたのは、大変意義深いことでした。家系図が完成したら送ってくれるとのことでも楽しみます。

言葉が通じないもどかしさをお互いしきりに感じながらも、会えたことは夢のようでした。ウジェニの手記の中に書かれていたことを思い出しながら、りんご園のことを尋ねると、今でもりんごを作っていると言って、フレッシュジュースをご馳走してくれました。秋にお祭りがあることも昔と同じでした。そして、ウジェニのことを本にしたいので、ソロンクーのことをたくさん知りたいと言うと、町の象徴であるかぼちゃのイラストが表紙にある冊子を見せてくれました。ソロンクーは人口五千八百人の小さい町で、たくさん写真の中にウジェニが通っていたというプロテストの教会や学校もありました。三、四時間過ごしてから、ピエールの娘さんも加わって家を背景に写真を撮り車を出しました。途中ウジェニの教会に立ち寄ってからモンベリヤールまで送ってくれました。駅では必ずまた行くことを約束し、固い握手をして別れました。ほんの半日訪れただけのソロンクーでしたが、古いものを大切にしてい、自然の美しい静かな落ち着いた町だという印象を持ちました。

日本に帰ってきてきてお礼の手紙と写真を送ると、向こうからもすぐにエレンとピエールの仲むつまじく写っている写真が届き、次の便ではソロンクーの立派な本を送ってくれました。こちらからは英語、向こうからはフランス語の手紙のやりとりですが、年末にはクリスマスカードも交換しました。これからもずっと文通を続け、そして、またいつかゆっくりソロンクーを訪ねたいと思います。

一九九八年一月 村上嘉代子

後記

どういいうわけか母は祖父龍平についてはあまり触れていない。米田龍平は明治元年（一八六八）大阪の造酒屋の息子として生まれ、十九歳で渡米したが、明治後期に帰国し昭和二年（一九二七）六十歳で没した。鈴木商店の破産した年である。

祖母ウジェニ（旧姓ガレ）は元治元年（一八六四）東部フランスでスイス国境に接したソロンクーで生まれ二十歳半ばで渡米し、ニューヨークでフランス語の家庭教師をしていたが、祖父龍平と巡り会い結婚してのち日本に渡り、昭和二十六年（一九五一年）八十八歳で亡くなった。祖母ウジェニは若い頃パリで開催された万国博覧会で、日本から出品された数々の作品に

接し、きわめて強く日本にあこがれたという。

龍平はユーモアに富み、酒脱でいわゆるハイカラであったそうだが、帰国した途端日本風の振舞に立ちかえり、祖母との波長が合わず、このことが母の祖父龍平に対する疎外を強める原因となっている。母はこのことを幾度か私に言っていた。しかし、その反面、母は龍平は子供の中で一番私を可愛がってくれたともいい、両親の生きざまの齟齬の中で娘時代の母は種々悩むことが多かったようである。しばしば母から聞かされた龍平の死についてであるが、死因は脳溢血であって、鈴木商店倒産の事後処理に走り廻った過労のためだったという。

今年（平成十一年）の正月、私共夫婦と長男は祖母の郷里ソロンクーを訪ねた。リヨンからローカル線で北東に二時間で古都ブザンソンに着き、そこでストラスブル行きに乗り換え、一時間でモンベリヤールに到着する。さらに車で東へ十五分程行くとソロンクーである。フランス東部のスイス国境に接したこの静かな地に立って、枯れた冬景色を望みながら、母から「ウジェニ・ガレは故郷に強い郷愁を抱いていた」と幾度か聞かされたことを反芻し、感無量であった。

このたび日本製粉株式会社のご厚意によって、この拙文を掲載させていただいたことを心から感謝申し上げます。

波岡茂郎

米田ウジェニの思い出

非売品

平成十三年 四月発行

著者——波岡かね子

発行者——波岡維作

米田・シートル在住

波岡茂郎

東京都杉並区上井草四―十二―六

村上嘉代子

福岡県行橋市金屋四〇五―一五

製作——日本製粉株式会社

東京都渋谷区千駄ヶ谷五―二七―五

印刷——大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町一―一―一